

『善光寺道名所図会』の西行伝承

中 西 満 義

はじめに

本稿は、長野県における西行伝承の様態を把握する一環として、豊田庸園利忠の『善光寺道名所図会』（自序・天保十四〈1843〉年、刊行・嘉永二〈1849〉年）に見られる西行歌、ならびに、西行伝承を取り上げ、いささかの考察を行うものである。庶民信仰の寺院としてあまねく知られ、「遠くとも一度は詣れ」と詠われる善光寺、国内外多くの人々がその聖地を目指して旅に身を置いてきた。折しも、平成二十一年己丑は、善光寺ご回向の年に当たるが、開帳期間に合わせた善光寺関連本の出版も進められていることであろう。挿画を多く取り込んだ『善光寺道名所図会』は、まさしく、江戸時代後期における善光寺参詣ガイドブックであったが、その中で漂泊の歌僧、旅の文学者の典型とされる西行は、いかように描かれ、いかなる役割を担わされたのであろうか。

I 『善光寺道名所図会』所載の西行関係記事

『善光寺道名所図会』は、善光寺へ参詣する人々が往還した善光寺道を中心に、街道筋の名所旧跡を紹介するが、それに止まらず、松本平をはじめとする各地域の風俗をも画文を奮って活写しているところに特長の一つが見出せる。善光寺道とは、一般に「中山道の洗馬宿から分岐し、村井・松本・岡田・刈屋原・会田・乱橋・法橋（西条）・青柳・麻績・猿ヶ馬場・稻荷山を経て篠ノ井追分で北国街道と合流し、丹波島から善光寺に入る道⁽¹⁾」を言うが、同図会は、加えて、穂高神社をはじめとする安曇郡の各所（巻之一～巻之二）を辿り、善光寺を紹介した後、飯縄原から戸隠（巻之三～巻之四）を廻って水内郡の諸処にまで足を伸ばす。さらに、北国街道沿いの丹波

島・(松代)・矢代・坂木(巻之四)を経て、出浦郷別所温泉(北向堂)に寄り道をしつつ、上田・海野・田中・小諸と北国街道を東行、追分から上州国境の碓氷嶺(巻之五)までを取り上げている。すなわち、同図会は、木曾路と飯田・伊那、そして、諏訪といった、信州南部地方を除く信濃国すべての地域の名所旧跡を網羅しているのであって、庸園が自序で、秋里籬嶋の『木曾路名所図会』を評して「洗馬の岐途より善光寺を過歴し、追分駅に到る、地頭の如きは蔑焉として、全く載せず」と記しているように、『木曾路名所図会』が取り上げなかった信濃国の名所旧跡や風俗等を画文によって紹介することを目的としている。以下に掲出する西行歌、ならびに、西行伝承に関係する記述も、挿画中のものを含めて、じつに多彩な様相を呈している。

ここでは、まず、『善光寺道名所図会』の順序に従い、西行関係記事を抜き出すことにする。白馬の佐野については、他文献からの引用が多く、典拠本文との校異も重要であるが、長文にわたるのでそれらは割愛する。その他の箇所についても、適宜、省略を挿んで最小限の掲出に留める。なお、『善光寺道名所図会』本文等の引用は、すべて版本地誌大系15『善光寺道名所図会』(臨川書店・平成14年)により、漢字はなるべく通行字体を用いる。また、句読点を付すなど、読み易さに努め、和歌などの詩歌を除いて清濁の別も施すことにする。

(*) 自序

古人謂へること有り。書は言を尽さず、言は意を尽さずと。もし、意を尽さむと欲するや、欠べからざるものは画図なり。〈中略〉

西行撰集抄に、所謂、佐野の二僧の跡、……、池田の西に有明山青霄に聳へ、〈中略〉

天保十四卯とし仲秋日

濃陽今尾藩 庸園利忠(判・豊氏利忠)

(1) 有明山(巻之一「安曇 池田」)

穂高に帰りて、貝梅村の乳川を渉り、孤嶋にて高瀬川を越し、十日市場・渋田見・瀧澤・林中等を過て、池田宿に至る。是を仁科街道といふ。

六丁程相對して巷をなし、其余町裏に散在す。繁昌の地なり。これより大町へ三里、

此宿の西に近く有明山とて高山あり。屏風岳・五六岳の間に見ゆ。信濃富士と称す。鶏・雷鳥・熊・くらしし等多しといふ。此あたりを有明の里といふも、此山の辺故とかや。浅間山に劣らぬ高岳にて、常に霧深く立こめて、山の姿もあらはならず。西行上人の歌とて人の口碑にあり。

信濃なる有明山を西に見て心ほその道をゆくなり

細野といふ所も程近し。猶、古詠あり。

統古今

かたしきの衣手さむくしくれつつ有明の山にかゝるしら雲 後鳥羽院

新拾遺

やよななけ有明山の土^{ほととぎす}字こゑをしむへき月の影かは 行家

夫木

夏ふかき岑の松かえ風こへて月影すゝし有明のやま 定家

此歌は名寄に秋風抄とあり

〈以下、略〉

(2) 佐野 (巻之二)

青木の湖を過て広野あり。佐野村の内にて仁科街道なり。佐野の二僧の塚は往還の左側に有。傍に碑銘を建。高サ五尺ばかり、巾三尺程の石なり。苔むして文字鮮ならず。裏に二僧の歌を彫れり。

引用 1、『撰集抄』巻六の第八話「佐野渡聖事」の全文、省略

引用 2、千丈実巖「佐野二僧碑銘」(『幽谷余韻』・後編巻九、文部・碑銘類所載)の全文、省略

引用 3、北越 芙蓉房述『佐野日記』の一部、省略

引用 4、「西行物語に出たり」として、西行略伝、省略

挿画 1、二僧の終焉の様を訪ねる西行の図 (半丁)

挿画 2、街道脇の佐野の二僧墳碑銘の図 (一丁)

挿画 3、佐藤兵衛尉憲義殿上にて御歌つかふまつる図 (一丁)

(3) 姨捨山 (巻之二 「放光院長楽寺」の挿画)

放光院長楽寺

十三景

冠山 更級川 田毎月 桂樹 姨石 甥石 姪石

宝ヶ池 小袋石 鏡台山 有明山 一重山 雲井橋

鏡台山以下ハ埴科郡にて、川向也。十三景は、西行上人の見立なりと云伝へり。

〈中略〉

冠着嵩

冠山ともいふ。姨捨山より壱里斗巳午の方也。荒山にて常に雲覆ひ、登る事あたはず。

毎年六月祭の頃、山明て漸登るほどの高嶺なり。

此歌出所不詳。只人口に唱ふのみ。

雪ならぬふしとやいはん信濃なる姨捨近き冠着か岳

(4) 吉原村 (巻之二)

「吉原の譜」〈前略〉……

西行の歌に 月ならてさし入影もなき儘に暮るうれしき秋の山里⁽²⁾

秋さびはかくこそあらめうるしの実

北越蟹士 芙蓉房長嘯

(5) 飯縄原 (巻之三 最終挿画)

むかし西行上人この国遊歴のみぎり、戸隠にまゐらんとて、飯縄原を通られしが、
みちの傍なる児の蕨を採居けるを見て

わらびにて手なやきそ、と

たはふれ給ひしかば、児

ひの木笠にてかしらなやきそ

となん、いらへける。夫より戸隠の日の御子の社頭に桜の盛りなりけるが、初き子の^{いとけな}
上人を見て、此桜につとのほりければ、西行

さるちごと見るよりはやく木にのぼる

と口すさみありければ

犬のやうなる法師きたれば

とつづけける。上人ふしぎの思ひをなし、是ただ人にあらず、登りてはあしかりなん
とて、是より引返し、安曇郡佐野のかたへ通り、有明山の歌ありとなん聞えし。

(6) 伺去 (巻之三)

次でいふ。此山の麓に伺去といふ村あり。按に西行の歌に「武士の習ふすさみはお
びただしあけ戸のしさりかものいれくび」此詞に出たる地名にや。

或は曰、開戸のしさりにや。戸を開く時、むかしみな開戸ならんには、あとへ退去を急なる
意に思ひよせたるべし。実峨々たる山をあふぐ地なれば、斯名づけたるにやあらん。

(7) 西行桜 (巻之四・戸隠山、「中院権現」挿画にもあり)

児桜 西行桜ともいふ。日の御子の社頭に在。今は植次の垂桜也。

(8) 西行戻橋 (巻之五、出浦郷別所名所旧蹟)

西行戻橋 冬くだ立、夏枯といふ。俚言あり。

(9) 白鳥社 (巻之五、「小栗 海野」、挿画にもあり)

〈挿画〉

新古今

宮はしらしたつ岩ねにしきたてて露もくらぬ日のみかけかな

西行

文治三年夏当社に詣でて

罪咎をあらひ流していさきよき清き海野やにこりなるらん

西行法師

(10) 布引山 (巻之五、「布引山釈尊寺」、挿画にもあり)

〈挿画中に〉「西行石像」

其外面に西行の石像と開山の宝塔並建。苔むしたるに葛蔓延纏へり。俚諺に西行法師諸国遊歴の砌、此岩屋に三年杖を留られしといひ慣せり。其石像の台に歌を穿す。

もとせへて折々さらす布引をけふたちそめていつかきて見む

〈中略〉

名寄

此歌秋の寝覚には伊勢とあり

嵐ふく雲のはたてのぬきをうすみむらきえわたる布引の山

長明

望月のみまきの駒は寒からし布引山をきたとおもへば

西行

望月駅は中山道にて、是より三里南の方に当ればなるべし。

Ⅱ 典拠（「地名考」を中心に）

本図会の作者豊田庸園は、後序に「能く画理に通じ、嘗て土佐家之藩籬に入る」と記されているように、土佐派の画業に通じた人であったようである。名所図会における挿画の重要性を自序で強調していることも頷けるが、『国書総目録』によれば、庸園利忠の著作は、本図会しか確認できない。著述をもって業としない彼が、信濃国の名所旧跡や風俗を名所図会というかたちで一書に纏め上げようとした経緯は定かではないが、自序、ならびに、小田切忠近の跋文によると、庸園は、天保元年頃、草津温泉に赴き、その途次に信濃国内を少しく辿り、翌年には立ち寄ることのできなかった土地を再度訪ねているようだ。この二度にわたる信濃来訪の期間や規模がいかなるものであったか、また、本図会制作に当たっての取材旅行がそれらの他に行われたのか、等々、成立の過程については詳かにしない。ただ、本図会を通観すると、画業のみならず、その文業にも目を眩るものがあり、多数の文献を渉獵した形跡が窺える。さらに、寺伝・社伝・縁起・由来・古記、等々に加えて、「俚諺」「俚老の談（話・説・曰）」などといった言辞が散見し、当地に赴かなければ手にすることができない、あるいは、当地の人々の助力⁽³⁾なくては得られない情報をも取り込んでいることは留意される。

青木隆幸氏によれば、本図会には百種類以上の文献が引用されているというが、信濃国関連書籍の中では「地名考」なる書名が目立つ。遺漏はあろうが、卷之一「穂高神社」、卷之二「長谷神社」、「泉小次郎」、卷之四「千隈川」、「鼠村」、卷之五「金剛山常楽寺（信濃の御湯）」、「布引山釈尊寺」、「頼太郎」の八箇所に見られ、庸園

が吉澤好謙の『信濃地名考』⁽⁴⁾（明和八〈1771〉年）を有力な情報源として活用したことは疑いのないところである。

前節に掲出した西行関係記事の先行文献を探ると、いずれにも「地名考」とは明記されていないものの、（１）有明山、（２）佐野、（３）姨捨山、（６）伺去の四箇所の記述に「地名考」のそれと関連する言辭が見出せる。とりわけ、『山家集』所収の西行歌（1010番）を地名の由来に絡めた（６）伺去については、

飯縄山〈割注、略〉

この山の麓に伺去といふ村あり。按、西行の歌にもののふの習ふすさみはおひた
たしあけとのしさりかものいれくび、此詞に出たる地名にや、

或人の、按に是開戸のしさにや、戸を開とき昔みなひらき戸ならんには、あとへ退去を急なる意
におもひよせたるべしと、実峨々たる山を仰ぐ地なれば、かく名づけたるもやあらん、

と、「地名考」に指摘がある。「或人の、按に」が「或は曰」と改められただけで、以下の考証はそのままに引かれている。そして、（１）有明山についても、伺去の項同様に「地名考」の強い影響を見て取ることができる。有明山は、早く『信府統記』（享保九〈1724〉年）に詳細な記述が見られ、以後、諸書に取り上げられている地名であるが、古歌の掲出状況の一致（後鳥羽院歌・行家歌・定家歌、歌順も同じ）と、「信濃なる」の歌を「西行上人の歌とて人の口碑にあり」（図会）とする言い回しと「例の西行の歌ちふもの人口にあり」（地名考）との類似から、「地名考」の記述に依拠したことは確かであろう。「地名考」では「信濃なる」歌自体は掲げられていないが、有明山を「俗に信濃の富士と呼ぶ」という鍵となる語（初出例）は、「信濃富士と称す」と、確実に引き継がれている。

（３）姨捨山については、庸園が自序で「偶、川中嶋の旧記、姥捨山の古歌等を誌すといへども、図画を附さず。予、嘗て以為、字に非ざれば、義を曉すべきなく、図にあらざれば情を観るべからずと」と、『木曾路名所図会』を批判しているように、本図会では「姨捨山の放光院長楽寺」の項は、挿画三面三丁を含めておよそ十丁（「冠着岳」を加えておよそ十一丁）と、相当な紙幅を費やしている。信濃国随一の歌枕（名所）であるだけにそれも頷けるが、西行に關係する記載はわずかに、「放光院長楽寺」挿画中の「十三景は、西行上人の見立なりと云伝へり」という一文に留まる。

十三景については、『信濃地名考』のほかに『信府統記』、似雲『更級紀行』、『信濃奇勝録』等の先行文献（『木曾路名所図会』にも記載がある）が関わってくるが、その中で「西行の見立て」云々とするのは、「統記」一書である。本図会はそれを踏襲したようであるが、「統記」とは十三景の地名が一致しない。十三景の比定地については、他の三書が近似するが、中でも「地名考」とは名称はすべて一致し、「宝ヶ池」と「小袋石」とが入れ替わるだけで順序ももっとも近い。なお、「冠着嵩」と立項された冒頭に「此歌出所不詳。只人口に唱ふのみ」と前書きして置かれる「雪ならぬ」歌は、『更級紀行』に「むかし西行法師の歌に」とある一首であるが、庸園はそのことにも言及していない。以上のように、姨捨山については、「地名考」からの影響関係だけでは十分な理解は得られない。また、庸園が姨捨山と西行の関わりをさほど重要視していなことの真意も判然としない。

（２）佐野については、伺去や有明山のような強い影響関係を指摘することができないが、「地名考」は、佐野を「名所に非ず」とした上で「西行上人撰集抄曰」として巻六の第八話「佐野渡聖事」の冒頭文を一部掲げたのち、「按、高井郡田中の湯の南に佐野あり、此説にいへる二僧の墓あり、又安曇郡大町の北佐野にも二僧の墓あり、其地いつれかしらず」と記す。「地名考」が高井郡と安曇郡のいずれかに定めかねていた佐野を、本図会が安曇郡のそれと判断を下した根拠は、『撰集抄』の後に載る「佐野二僧碑銘」と「佐野日記」の記述内容にほかならない。千丈実巖の文は当該箇所直前の「清音の滝」「静の墳墓（磯禅師墓碑銘）」の二項にも連続して掲載されており、大町近隣の名所旧跡を語るには欠かせない文献であったのだろう。そして、「佐野日記」の芙蓉房については、（４）吉原村の項に引かれる「吉原の譜」の作者「北越蟄士 芙蓉房長嘯」^{（５）}として再登場する。芙蓉房の俳文はいずれも西行に関わるもので、西行伝承に関わった人物の一類型として郷土の俳人たちがあったことを窺わせる。

同図会に従うと、池田から宮本神明宮、清音の滝、静の墳墓、仁科古城などを経て、佐野村の二僧の塚へと辿り着く。当該箇所の記述は、先掲のごとく簡略であるが、続いて、『撰集抄』巻六の第八話「佐野渡聖事」の全文、千丈実巖「佐野二僧碑銘」（『幽谷余韻』・後編巻九、文部・碑銘類所載）の全文、そして、「北越 芙蓉房述」とする『佐野日記』の一部、さらに、「西行物語に出たり」として西行略伝、と他書の引

用で占められている。挿画についても二僧の終焉の様を訪ねる西行の図（半丁）、街道脇の二僧の碑の図（一丁）、「佐藤兵衛尉憲義殿上にて御歌つかふまつる図」（一丁）の三面におよび、その分量およそ八丁半を占める。善光寺道から外れた一旧蹟、「地名考」で「非名所」とことわられている土地、を紹介するに足るは過剰と言わざるを得ないが、自序において、ことさらに「西行撰集抄に、所謂、佐野の二僧の跡」と明記していることから、庸園にとっては意味のある土地であったと考えられる。

長文の白馬・佐野の記事が伏線となり、巻之三の最終挿画「飯縄原・戸隠を旅する西行」において、信濃国を旅する西行のイメージが創出されるのである。

Ⅲ 西行の歩んだ道

本図会は、全五巻中、巻之三の大半が善光寺の記事で占められている。善光寺道のターミナルと言うべき善光寺をその中心に置くことは至極当然と言えるが、「実は善光寺に関する記述は本書の中でもっとも退屈な部分である」（青木隆幸氏）との指摘があるとおおり、冗長の感が拭えない。ようやく善光寺を後にして「荊萱堂」に立ち寄り、「奇勝録」にも取り上げられている「ぶらんど（薬師）」などを經由して戸隠を目指して飯縄原を通過する。先掲（５）飯縄原の記事は、巻之三の最終挿画に記されているもので、この一図は本図会における西行伝承の眼目と言ってよい。さて、この記事には

A、飯縄原

わらびにて手なやきそ（西行）

ひの木笠にてかしらなやきそ（みちの傍なる児）

B、日の御子の社頭

さるちごと見るよりはやく木にのぼる（西行）

犬のやうなる法師きたれば（いとけなき子）

という、土地の子どもとの二組の掛け合い問答を載せている。A、Bいずれも土地の子どもをからかった西行が逆に切り返されるというもので、A、飯縄原ではさすがにと通り過ぎたものの、B、日の御子社では「上人ふしぎの思ひをなし、是ただ人にあらず、登りてはあしかりなん」と思い、引き返すのである。Aについては掲出例が他

はなく、Bについては、西澤美仁氏「長野県の西行伝承」⁽⁶⁾によれば、『当山絵図名所古跡付』（寛政十二〈1800〉年）に載る記事が本図会に先行する唯一の文献という。

修行の旅にある西行が土地の人々との問答をすることについては、『新古今和歌集』に採られている江口の遊女妙との贈答が著名であり、さらに、子どもとの関わりについては『吾妻鏡』が伝える「銀の猫」の話などが想起される。西行伝承における問答譚については、花部英雄氏「西行問答譚の展開」⁽⁷⁾に詳しいが、和歌の名手西行が名もない土地の子どもに言い負かされるという構図は「西行戻」伝承の典型を示している。挿画右面は、蕨の入った籠を背負う子どもと槍笠を背負った西行が対面している様を描き（飯縄原）、左面には牛の背に跨って笛を吹く子どもを描くが、これは先掲（7）西行桜（児桜）に登って「犬のやうなる法師きたれば」と切り返す子どもを異時同図的に表現したものであろう。この左面の構図は「十牛図」の第六「騎牛帰家」に倣ったもので、例えば相国寺蔵の伝周文筆画のそれとよく類似しているが、画理に通じた庸園の真骨頂を示す一画と言えようか。

画はさておき、文に戻ると、二つの掛け合い問答を掲げた後、本挿話は「是（筆者注、戸隠）より引返し、安曇郡佐野のかたへ通り、有明山の歌ありとなん聞えし」と締め括られるが、この一文の重要性については、以前、「有明山の西行—西行伝承歌をめぐる—」⁽⁸⁾において

名所図会に従って西行に関係する箇所をたどると、佐野の二僧塚を中核としつつ、有明山、そして、戸隠におけるそれぞれの西行伝承が繋ぎ合わされていく様態が浮かび上がってくる。戸隠において、童との問答の末、西行は、怖じ気をなして踵を返して山を下りる、そして、安曇郡佐野を通り、有明山の一首を詠じたといった記述は、西行が当地を踏破したことの信憑性を高める働きをなしていて巧妙である。つまり、伝承と伝承とが繋ぎ合わされることによって、図会を読む読者のうちに「西行の歩んだ道」なるものが形成されるのであって、そのような過程を経て、「信濃なる」の歌は、西行が諸国行脚の途次に有明山を見て詠じた、というふうに解されていくのである。

と指摘した。つまり、本挿画の画文を目にした読者は、つづく巻之四に載る（7）西行桜（児桜）の予備知識を得るとともに、翻って、巻之一の（1）有明山の歌を想い

起こし、巻之二の（２）佐野の記事を脳裏に呼び戻すのである。本図会の展開とは逆路になるが、善光寺→飯綱山（伺去）→戸隠山→（鬼無里）→白馬佐野→大町→有明山という西行の辿った道が描き出されてくるのであって、それまでは点として別個に存在していた三土地の伝承が本図会の一文によって連結していく様を見て取ることができる。さらに、想像を逞しくすれば、これまでに触れていない（８）西行戻橋⁽⁹⁾（出浦郷別所温泉）、（９）白鳥宮、（１０）布引山の三箇所も繋ぎ合わせることが可能であろう。北国街道東の布引山で三年修行の後、望月の牧や白鳥宮を過ぎ、別所温泉に立ち寄った西行は、月の名所姨捨山で十三景を見立て、善光寺を参詣、……、といったように、本図会の読者は、かつてこの地を旅した西行に思いを馳せつつ、かれとともに旅を続けるのである。

おわりに

『善光寺道名所図会』の作者庸園は、自序に「ここに洛の秋里籬島が文化の頃編集する『木曾路名所図会』を閲するに」と、本図会を著述する際に先駆者籬島の業績を強く意識していたことを表明する。その言辞は、籬島がし残した事柄、すなわち、信濃国の名所旧跡、風俗を画文において網羅する、という強い意欲の表明であったが、西行伝承についても同様の思いを抱いていたのではないだろうか。『木曾路名所図会』には、醒井の「西行水」、「（地藏堂）紫石燈籠」（巻之一）、細久手の「月吉日吉里」、大井の「西行法師塚」、「西行硯池」、「大井駅」、「花なし山」（巻之二）と、近江の醒井と美濃の大井近隣の伝承を積極的に掬い取っている。その一方で、信濃国にいたっては、わずかに「須波之湖」（巻之四）に「春をまつ」歌が古歌として引かれるに留まる。かりに「中山道妻籠の橋場より、右へ折れて元善光寺へ参り、塩尻へ出る道の程は、後編にゆづりて爰に略す」と、凡例に記される後編が上梓されていたならば、どのような西行伝承が掬い取られたのだろうか、という思いは残るが、本図絵を繙く読者たちには、旅の先達・西行の足跡が確実に刻み込まれたに相違ない。

おわりに、本稿で考察し得なかった白鳥宮、布引山などを含めて、庸園の創出した「西行の歩んだ道」について、改めて捉え直す機会を得たいと願っている。

注

- (1) 版本地誌大系15『善光寺道名所図会』（臨川書店・平成14年）の解説。
- (2) 『山家集』（陽明文庫本）・三一八番（題「閑待月」）、第二句「さしいるかげの」。
『西行全歌集上』（新典社叢書4・筑波大学附属図書館蔵本・三二四番）では、「さしいるかげも」。
- (3) ただに資金的援助ということではなく、宿泊場所の提供、名所旧跡の案内、文献の貸与などの情報提供、等々、を意味する。本書成立の背景には信濃国に住む支援者、注（1）解説で指摘されているように、「松本初市」の画面に描かれる書肆高美屋の高美甚左衛門（同画の作者）をはじめとして、自宅の庭園（林泉）が描かれている洗馬の志村氏、百瀬氏、そして、南原村の百瀬政武などの存在に留意する必要がある。その他、挿絵に店舗が大きく描かれ、店舗名が明記されている篠ノ井迫分立石の茶屋「やなぎ屋」や、上田の呉服店「わたや」「よろづや」なども注目される。
- (4) 『新編信濃史料叢書』（信濃史料刊行会、昭和45年）所収（第一巻）の本文に拠る。以下の引用も同じ。また、『信府統記』、『信濃奇勝録』等の諸書についても、『新編信濃史料叢書』所収の本文に拠る。
- (5) 『長野県俳人名大辞典』（郷土出版社、平成5年）・「長嘯」の項、参照。
- (6) 『西行伝説の説話・伝承学的研究（第三次） 科学研究費研究成果報告書』（平成20年）、所収。なお、Bの掛け合いは、『伊勢参宮名所図会』巻三の挿画（垂水・成就寺）に見られる。
- (7) 『西行伝承の世界』（岩田書院、平成8年）、第二部第二章、参照。
- (8) 注（6）報告書、所収。
- (9) 「西行戻橋」については、『信濃奇勝録』が先行する文献で、本図会「別所細見惣図」の挿画は、「奇勝録」の「別所温泉」図を踏襲しつつも、北向堂と門前の住居を克明に描いている。名所・旧蹟の標記を除くと「いなば屋」という文字が目止まる。なお、「奇勝録」では挿画にも左端に「西行モトリハシ」と明記するが、図会は省略している。取り上げ方も簡略と言わざるを得ない。